

シリーズ：進化し続ける産総研のコーディネーション活動(第35回) 産総研-公設研の連携深化で地域産業活性化を！

中国産学官連携センター

イノベーションコーディネータ つちとり いさお
土取 功

思いもなかった産総研のコーディネータに

私は長年、広島県の西部工業技術センターに在職し、地域企業を相手に研究や技術相談に従事してきました。2011年3月の退職時には、思いがけず産総研から招聘をいただき、お世話になることにしました。2011年5月から産総研中国センターでイノベーションコーディネータとなって1年半余りが経過しましたが、地域企業のこととはともかく、産総研の研究領域の幅広さをあらためて認識しているところです。

外から見た産総研

広島県の西部工業技術センターにいた頃は、産総研中国センターは中国工業技術研究所時代とは様変わりしてバイオマスが主となり、ほとんど関係無くなった、という認識でした。技術的にも距離的にも近い地域の工業技術センターでもそうですから、まして企業にあっては推して知るべしかと思われます。外から見てみると、特に産総研になってからは組織的にも内容的にも非常にわかりづらくなった印象です。加えて公設研にとっては、研修や共同研究事業などを通じての人的交流も途絶えて、生きた情報が入らなくなり、また公設研側も地域プロジェクトなどに組み込まれるようになって、いつしか産総研に対する関心が薄れているように思われます。

地域公設研の実情

現在、多くの地方財政は逼迫し、ひっぼく県庁組織の人員削減が進められる中、必然的に公設研の存在意義も問われており、地域の工業技術センター所長は、地域企業・産業界から必要とされてこそ存続できるという、ある種の危機意識を強くもっています。公設研は地域の企業と日常的に技術的なやりとり(依頼試験・技術相談、共同研究など)を通じて企業の技術者・経営者との信頼関係を築いています。最近の戦略的基盤技術高度化支援事業(サポイン)などでも地域の公設研が比較的多く名を連ねていますが、そのほとんどは企業からの参画要請に基づくものです。

中国地域のイノベーションハブを目指して

産総研の地域センターが、地域の主要産業に関連した研究部門をもたずにイノベーションハブの役割を果たすには、工業技術院時代から培われた地域公設研との信頼関係を基にし

て、産総研つくばセンターや各地域センターのシーズ技術や研究課題を地域企業につなぎ、その地域公設研の助けも借りながら展開・発展(共同研究など)させていくのが望ましい形の一つかと思います。

中小企業が何かを開発しようすると、試験機や測定器がない、実験場所もない、……さらに人もいない、ということも珍しくありません。公設研は身近な頼りになる存在を目指して地域で頑張っており、通信手段が発達したとはいえ、つくばと中国地域ではやはり距離もあって、細かな対応や即応性には限界があります。産総研のつくばセンターや各地域センターを中国地域の企業につないでも、実際はその技術の核心部分への対応が主となり、その周辺や関連技術までは手が回らないことも多いかと思われます。このような開発に伴うフォローを企業の様子がよくわかっている地域公設研に担ってもらえば、開発もスムーズに進みます。それには地域公設研にもメリットが見いだせるような配慮も必要で、この辺がコーディネータの仕事であろうかと思っています。

産総研中国センターのバイオマス研究センターは、2012年4月からバイオマスリファイナリー研究センターとなり、地域企業とのかかわりも増えてくると思います。この地域で主要なものづくり関連技術では、これまでの経験を生かして、各地域公設研との連携をより深化させるべく、産総研と公設研・地域企業との連携を進めて地域公設研とWin-Winの関係を作っていきたいと考えています。



中国産学官連携センターが地域公設研(山口県産業技術センター)とともに、特徴的な乾燥技術をもつ山口県の企業((株)木原製作所)を訪問。右から二人目が筆者